鎌倉を世界遺産に

慶應義塾大学理工学部化学科 2 年
菊池 憧子

私は鎌倉が大好きだ。私の祖父母は鎌倉に住んでいるので、ここにはたくさんの思い出がある。「武家の古都・鎌倉」を世界遺産に登録しよう、という動きが活発化している今、私の大好きな鎌倉をより多くの人に知ってもらうべく、その魅力についてスピーチしたいと思う。

私は幼いころからよく、祖父母を訪ねて鎌倉へ遊びに行った。当時は、鎌倉という町の歴史的な位置づけなど分かっていなかったが、山も海も楽しめる鎌倉で過ごす時間は子供のころの私にとって特別なものだった。春には山桜の淡いピンク色に染まる山のあちこちから聞こえる鶯の鳴き声を楽しみ、夏には鎌倉の海で思い切り遊び、秋には紅葉の美しいお寺をめぐり、そして冬は落ち葉を踏みながら山道を歩いて木々を飛び回るリスたちの姿を追いかけた。元日には必ず鶴岡八幡宮へお参りに行った。子供ながらに、私は四季を通して鎌倉の魅力を感じてきた。

鎌倉の魅力はどこからくるのだろうか？それはまぎれもなく、鎌倉に山があり海があるからである、と私は考える。三方を山に囲まれ、一方は海である鎌倉は、中世において、その地形的な利点から自然の要塞とみられた。鎌倉への出入り口は七つの切通しのみで、これらは今でも昔をしのぶことができる形で残っている。鎌倉の山を実際に歩いてみると、複雑に入り組んだ谷戸、人が一人やっと通れるような切通しがあり、樹木が密生する山林の中をかきわけて鎌倉の中心部に至る。鎌倉攻め最大の難所と言われた化粧坂切通しは、秋にはナナカマドで真っ赤に染まる私のお気に入りの場所だ。騎馬戦が戦いの主な形態であった時代には鎌倉に攻め入ることは極めて難しかったのだろう。

だからこそ、源頼朝は武士の都として鎌倉を選んだのだ。1192 年に鎌倉幕府が設立されて以来 100 年余りにわたってこの地が政治の中心となり、栄華を誇ることになったのである。しかし、武士たちは貴族中心の京の都のような華やかで雅な都を作っていったわけではない。鎌倉には武士の権力を人々に知らしめるためのきらびやかな建造物は何一つなかった。かの有名な鶴岡八幡宮も、その建立の目的はすなわち戦勝祈願であり、武士にとって最も大切なことは戦いに勝つことであったと分かる。

武士が台頭した時代には仏教にも変化が生じた。貴族の現世利益をかなえる宗教から、いつも死と隣り合わせの武士に心の平安を与える宗教へと変わったのである。それゆえ、鎌倉に現存するお寺の数々は華やかでこそないが、心が洗われるような静かさと穏やかさを持っている、と私は思う。実際、平安時代までに建てられた京都にあるお寺は貴族の経済力を見せつけるように贅沢であるのに対し、鎌倉にある数多くのお寺は、どれも自然に調和した簡素で静かな佇まいである。うっそうと生い茂るアジサイに埋もれるようにして

在る明月院など、鎌倉のお寺は四季折々の美しい自然の中にとけ込んでいる。

そして、それらのお寺にふさわしい仏像を造るため、鎌倉時代には多くの仏師も誕生した。戦乱が続く武士の世では、それまでの柔和な表現法とは異なり、武家の気風があらわれた質実剛健な力強い作風に変わっていった。これは高徳院の大仏にもみられる。鎌倉時代に生まれた腕のある仏師たちは仏教美術、仏教彫刻を武士の生活の中にも取り入れた。それが鎌倉彫であり、伝統工芸品として高い価値を持っている。

武士の都・鎌倉、というと戦乱の殺伐としたイメージを生むかもしれない。しかし、武士が台頭したからこそ鎌倉は都となり、武士の逞しい生きざまに裏打ちされた文化が根づいた。鎌倉の町には至る所にその面影があり、鎌倉を訪れる人は誰しもそれを肌で感じることができるだろう。鎌倉には世界遺産に登録されるだけの価値がある。